# リレーエッセイ

## 私の大学院生時代

野中　健一

私の大学院生時代は「五里霧中」だった。

文学研究科で人文地理学の教室に入った私の関心は、自然、それも身近な自然を人はどのようにとらえて関わり合いをもつのだろうか？それがどのようにして作られるのだろうか？その端緒が身近なところだからこそみえてくるのではないか？にあった。それをどうやって地理学の学問の中に位置づけ進めていくか、常に悩み続けていた。「土地と人間との関係」を解明することが大きなテーマの地理学で当然扱えるものだろうと思っていた。卒論で手がけた「昆虫食」を続けようとすれば「ほとんどの人が食べないようなものを調べてなんの意味があるのだ」、「じゃあ川魚にする」といえば、「どうして海の魚ではだめなんだ」など先生や先輩諸氏から厳しく突っ込まれていた。「さんざん議論は出尽くしましたが最後にもう一つ苦言を呈します」とまで指導教官に言われる始末であった。他の人たちには虫や川魚は、目にも口にも入ってこず、環境要素としてみられていないもののようだった。社会経済的に重要なもの、地域を代表するような主要なものを取り上げることこそ地理学だという風潮が強かった時代である。どうやら私の関心は地理学世間的に見てマイナーなものであるらしく、ゼミでの発表や学会発表でも、内容以前に拒否される感じで暗澹たるものであった。もっともこのような状況に陥ったのも私の説明の仕方があまりにも拙かったためで、「理論武装をしっかりしなさい」とゲキをとばされていたのだが、未熟な私には、そんなことやって何になると否定されているようにしか聞こえなかった。なかなかわかってもらえないもどかしさに、自分はなにができるんだろうと引きこもったり、こんなところやめてやる、他の道に進もうなどと破滅的に思ったことが幾度もあった。

そんな日々を悶々と過ごしていた博士後期課程二年の早春、地元での人類学の研究会に出席した。発表者は岐阜大学の口蔵幸雄先生。現地の暮らしぶりを人の生業活動や野生食物利用に注目して生態人類学の方法で明らかにしていく生々しい報告だった。これこそまさに求めていたものだ！目の前がぱっと明るくなった。修士論文で河川漁撈を取り上げた時、ずいぶん生態人類学の文献をレビューした。また考古学・人類学の演習では生態人類学の古典“Man

the Hunter”を輪読したこともあった。自然と人間の関係の最前線の現場に長期間住み込んで、人の狩猟採集活動にどっぷりつかり、活動をエネルギーや技術・知識から解明していく生態人類学は、わくわくする学問であり、私のあこがれだった。その最前線でやってこられた先生がここにいる！発表を終えた先生をつかまえて、「ニューギニアではどんな虫を食べるんですか」にはじまって、お話しさせていただいた。そのうち「君のやっていることは生態人類学だねぇ。生態人類学研究会で一度発表してみなさい」といわれた。あこがれの学問と自分も同じだといわれたことはとてもうれしかった。その開催日も近づいており、会場も地元に近い浜松・舘山寺温泉だった。温泉で学会というのも不思議だったが、「自分は後から行くから、がんばって発表してなさい」との口蔵先生におされて、知り合いが誰もいない、学問分野も違うというところへ単身出かけたのだった。

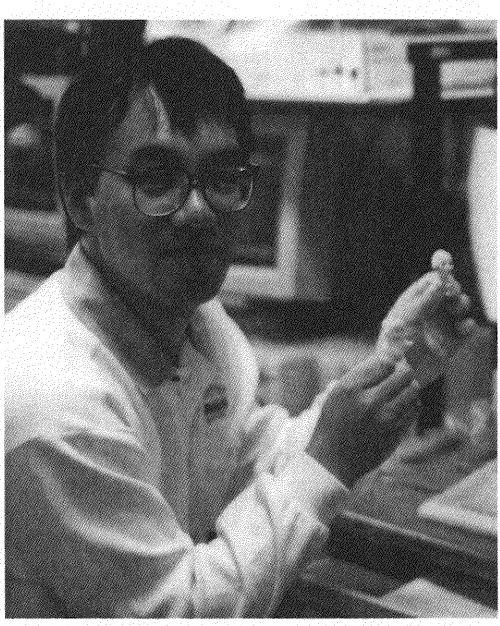
発表プログラムや参加者をみると、これまで読んできた論文や著書の先生方の名前がずらりと並んでいる。大学院生にしても生態人類学の専門の教室の人たちで、アフリカやパプア・ニューギニアなどで参与観察調査をしてきた成果の発表だ。いきなり飛び込んできた聞いたこともない若造でしかも「日本の昆虫食」の発表なんて、「場違いだ、そんな当たり前のこといわれなくてもわかる、方法が全然違う」などいわれたらどうしよう?不安と緊張でどきどきだった。おまけに、会場は温泉の宴会場。座敷に参加者があぐらをかいてびっしり座っているが、芸を披露するステージで発表するのだ。

発表がはじまると議論の応酬がものすごい。発表では詳細な観察データが紹介される。なのに「なんだそのデータのとり方は」「何がいいたいんだ」と厳しい質問が浴びせられていた。発表時間もたっぷりとってあり、激しい議論の応酬はいままで自分が参加してきた地理学の学会とは大違いだ。なかには途中で「こんなの聞いてられるかよー」とまで言われてしまう発表もあった。

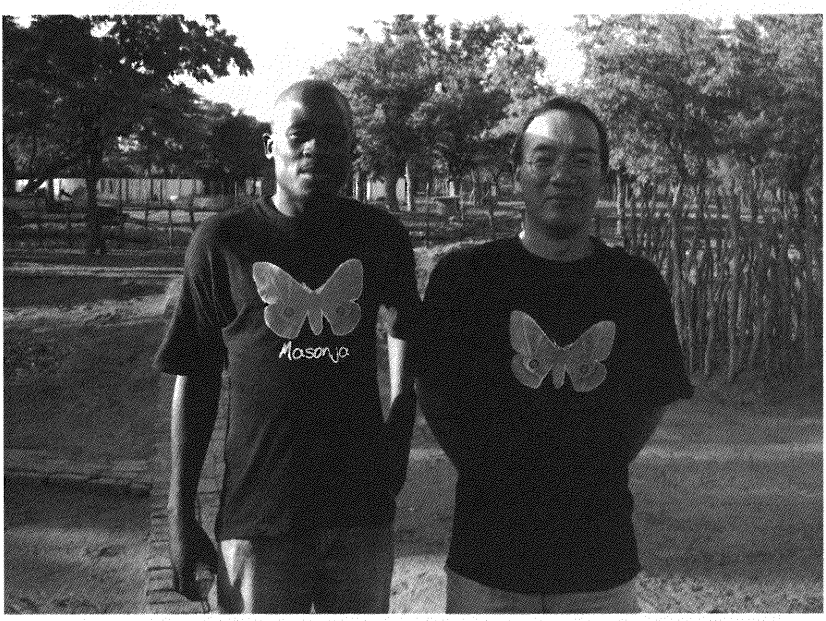
やがて私の番が回ってきた。緊張も最高潮だ。当時は、レジュメを作り、発表内容をトピックごとに要素にまとめ図表で説明し、スライド上映という形式だった。これまで調べた結果をまとめて発表したが、そこには生々しい直接観察データがない。だが、幸いにも途中で止めてしまえといわれることなく進み、スライド上映となった。どんな虫を食べるのか、どこにいるのか、どうやって採るのか、どう利用するのか、言葉ではなかなか伝わらないので、その一部始終を写真で紹介していった。スライドを終えて、明かりが灯ったとたん、会場から大きな拍手がわき起こって

しまった。まるでスタンディング・オベーションを受けたかのようだった。なし崩し的に終了となってしまった。そして矢継ぎ早に質問が飛んできた。内容についてもっと知りたいというものばかりだ。いつもは発表の入り口で止まっていたのに、こんなに突っ込んでしかも好意的に聞いてもらえることがあるのかと、これまででは考えられないことだった。恐る恐る発表を終えて、遅れてきた口蔵先生が入り口近くに座ってにこやかな表情でおられたのをみて、ほっとした。

夜の懇親会も驚きの場だった。さきほどの会場は宴会場に変わっている。飲んで騒いでと大賑わいだ。その中で、一人一人のスピーチでも私の発表を引き合いにだして講評いただいた。知り合いもなく座っているとあちこちから声をかけていただいた。ある先生には、外へ飲みに行こうと連れ出され、「おまえは何をおもしろいと思っているのか」と延々議論をふってこられた。先生も院生もいっしょになって膝をつき合わせ酒を酌み交わしながら、明け方まで、フィールドの話題、研究とは何かと、魅力的な話題で延々続く熱気溢れる議論の場に感動した。温泉に入れば、そこにはハダカの先生方がいる。湯船に浸かり、ゆったりとした気分でおだやかに語りかけられる。なぜこの研究会が温泉で開催されるかわかった。翌朝、饗宴の後の会場へ行けば、大御所の川喜多二郎先生がＫＪ法を自ら実践してカードを並べ、ネパールの発表の準備をされているのを目にした。


大学院博士後期課程３年の頃（1991年夏）

これが、フィールドワーカーの研究の世界だ、学問なんだと、世界がぱっと明るく開けた。自分が関心をもつ対象で話ができるんだ！これまで、「なぜ昆虫食を対象にしなければいけないのか」と問われつづけ、学会では「へんな食べ物を取り上げればいいと思っているヤツがいる」と聞




南アフリカで共同研究者マシュドゥ君とモパニイモムシの調査（2007年２月）

こえよがしにまで言われたこともあった。対象から始めていく、現場で発見することから始めていく、そして自然と人間の関係の解明を当たり前のテーマとして扱うこの分野に大いに惹かれた。こうして、生態人類学にも浸ることになった。後で聞いたところによれば「久しぶりにバカが現れた」ということだったらしい。自分の出来の悪さが評価されることもあるのだと、これまた大転換だった。

この時の発表がきっかけとなり、田中二郎先生・菅原和孝先生らの率いるカラハリ砂漠の狩猟採集民の調査隊、秋道智彌先生の率いる、そして口蔵先生もメンバーのインドネシア調査隊に参加させていただき、海外でフィールドワークの経験を積むことになった。そこでは、虫も魚も鳥も獣も植物も等価な存在であった。修士論文での河川漁撈の研究や山村での生業研究が役だった。発表を聞いていただいていた伊谷純一郎先生のご尽力で、自分の出身大学では「君には文学部では博士学位を出せない」とまでいわれた研究に対して、生態人類学で学位をいただくことができた。これを下敷きとして「民族昆虫学」というディシプリンを掲げた書も上梓することができた（『民族昆虫学 ― 昆虫食の自然誌』（東京大学出版会、二〇〇五）。そこでは卒論や院生時代の研究が重要な章となっている。

生態人類学を学んだことによって、ぎゃくに地理学で用

いられる環境や空間の概念も再認識できるようになった。両学問の長所を融合させて『環境地理学の視座 ― 〈自然と人間〉関係学をめざして ― 』（昭和堂、二〇〇三）にまとめることができた。そして、二〇〇七年四月に立教大学へ着任した。ここでの専門は「文化環境学」。まさにこれから構築していこうと考えていた学問であり、大学院生時代からのテーマだったのだ。

温泉での発表デビューはまさに私の人生を大きく展開させるものとなった。行き詰まっていたとき、ちょっと外の空気に触れてみたところで、自分のやっていることがけっして特殊なものでない、当たり前のことであることがわかった。その相対化ができたとき、私は自分のやっていくことを定めることができた。そして、マイナーで地味な内容ながら今に至るまで二十年あまり続け今に至っている。

大学院生時代は、先の全く見えない暗中模索の時であろう。そんな時にすでにやるべきことが定まっていたり、その時点で先が見えるようなことは、実は大したことでないことが多い。真っ暗闇の中で少しでも光が見えたとき、その光を辿ってみるかどうか。光に引き寄せられていく私は、虫だったら焼け焦げていたかもしれない。だが、人だったのだ。「虫」ではなく「虫食む〝人〟」であり、その人々の自然や世界を見通す視線、自然に生きる人々の世界を明らかにすることだったのだ（『虫食む人々の暮らし』NHKブックス、二〇〇七）。

（本学文学部教授）